

杉山論文「就労に挫折した自閉症青年の臨床的検討」を読んで——第16巻3号——

東海大学 小林 隆 児

最近になってわが国においても成人期に達した自閉症者の詳細な実態が少しずつ報告されるようになってきた。それらは従来の悲観的な自閉症予後観を多少なりとも覆す結果を示し、これまでの自閉症療育の歴史の何らかの成果であるといっているかもしれない。

義務教育年齢の時期に専門的な療育を受ける機会をほとんど得ることができなかった第1世代の自閉症者に比して、最近成人期に達した第2世代の自閉症者では自閉症療育の恩恵を比較的早くから受けている人々が少なくない。第2世代の自閉症者の就労率は10%台～20%台にまで向上している。この結果はわれわれとしても素直に喜んでよいかもしれない。ただ就労したにもかかわらず、彼らのなかに途中で挫折してしまう例が少なくないことが杉山論文によって明らかにされている。杉山氏が関係している就労例の約3分の1にもなるという。これほどまでに高率で挫折例が存在しているのは大きな驚きである。さらに注目しなくてはならないのが、挫折例に高機能自閉症が多く含まれていることである。

恐らく幼児期から学童期の頃には彼らの将来に関する展望は家族にとっても療育者にとっても明るいものであったに違いない。しかし、彼らの孤立した生活様式が就労の段階となって大きな阻害要因になってしまうというのである。

本論に示された高機能自閉症の適応の困難さは、従来の自閉症治療論に大きな反省を促しているように思われる。自閉症の原因論が心因論から器質論へと大きく方向転換し、この20年余り言語認知障害仮説に基づく機能訓練主体の治療論がわが国

においても大勢を占めてきたといつてよい。そのなかで家族も療育者もとにかく彼らの言語、認知、学習能力を少しでも向上させようと多くのエネルギーを割いてきたのである。極端な例ではスパルタ教育ともいえるものさえ存在していた。

自閉症の人々は孤立を好むようにみえることは確かであるが、それは恐らく生来的なものではないのではなからうか。一見無愛想で行動面では自閉症に見えても彼らは内面で他者との交流を強く求めていると思われる事実を筆者は数多く経験している。

高機能自閉症の場合、家族は彼らのもつハンディキャップを軽視しやすいが、そのために幼児期から学童期における療育において何か重大な落とし穴が隠されているのかもしれない。それは決して家族のみに帰せられるような問題ではなく、今日の自閉症の治療論の中にこそその問題の核心があるかもしれない。そのような意味で杉山論文の結果の意味するものは非常に重いといわねばならない。おそらくわが国で最も多くの自閉症の症例の治療を経験している研究者の一人である杉山氏に今後の研究のさらなる進展を期待して止まない。

今日、自閉症問題に限らず、人間そのものの評価が断片化された能力主義に堕している現状をみると、自閉症の療育の問題を検討することは、自閉症問題という狭小な世界から脱皮しわれわれ自身の人間観そのものを真摯に問いなおすという作業へと必然的につながっていくように思われるのである。